

文部省唱歌「雪」の作品研究 ～白秋の童謡観と古典籍を照合して～

A Study on *Shoka* “*Yuki* (Snow)” : verification against
Hakushu Kitahara’s view of Nursery Rhymes and against classics

宮田知絵¹

Chie Miyata

要 旨

唱歌「雪」は明治の末に初出して以来、現在も子どもから大人まで広く知られる唱歌作品である。一方、北原白秋は明治の唱歌を批判し、数々の著作を通じて芸術としての「童謡」の確立に、大きな足跡を残した。そこで白秋の唱えた童謡の理想を彼の著述から鮮明にし、唱歌「雪」をその童謡観と照合させることで、改めて本作品の価値評価を行う。また本作品の歌詞は、明治期の国文学者の合議によって作られた歴史に鑑み、音楽研究の分野では論じられることが少ない日本の古典籍に踏み込んで、重要な語句について論考した。その結果、白秋が備えるべきとした基準“風土習慣”、“生活感情”、“伝承性”、“産土のにはひ”の観点から、また白秋が求めた“大人も得られる深い感銘”の観点からも、本曲には平安期以来の古典籍とも血脈を有する語彙が織り込まれており、その基準を立派に充足していることを示す。最後に唱歌「雪」の音楽と詩を論じ、本曲の総合的な研究を展開する。

第1章 唱歌「雪」 初出とその前後の類歌

“雪やこんこ あられやこんこ”…人々に今も歌い継がれる唱歌「雪」は、明治44(1911)年、文部省による『尋常小學唱歌(二)』に所収され初出した歌である。当時の慣例により作詞者・作曲者の名は伏せられ詳らかではない。以来、およそ百年以上もの長い歳月を経た今日も、この唱歌は多くの子どもたちに歌われ、大人も胸中の記憶に懐かしくとどめる佳品と言えよう。雪の歌と言えば、この唱歌「雪」の初出する4年前の明治40(1907)年、東儀鉄笛の作曲、巖谷小波の詩により同じく「雪」と題された歌が『お伽唱歌(上巻)尋常科の部』に所収され発表されている¹⁾。

<p>一 雪やこんこ 霰やこんこ。 降っては降っては ずんずん 積もる。 山も野原も 綿帽子かぶり、 枯木残らず 花が咲く。 雪やこんこ 霰やこんこ。 降っても降っても まだ降りやまぬ。 犬は喜び 庭駆けまわり、 猫は火爐で 丸くなる。</p> <p>尋常小學唱歌 「雪」 作者不詳</p>	<p>幼稚園唱歌 「雪やこんこん」 雪やこんこん あられやこんこん もつとふれふれ とけずにつもれ つもった雪で だるまや燈籠 こしらへましょ お姉様</p>
---	---

双方を比較すると『お伽唱歌』掲載の「雪」と唱歌「雪」との関連性は詩句においても、また音楽構造においても見て取れない。しかしさらに遡ること10年前の明治34(1901)年には、滝廉太郎が作曲、東くめが詞を担当した『幼稚園唱歌』の中に「雪やこんこん」の表題を持った歌を見い出すことができる。この作品は、とりわけ歌い出しの部分において、両曲を見まがうほ

¹ 帝塚山大学 教育学部 准教授

ど似通った歌詞を持つ作品である。この『幼稚園唱歌』所収の「雪やこんこん」から、本曲は歌詞の面で影響を受けているのでは、と考えることもできるが、この冒頭の歌詞“雪やこんこ(ん)あれやこんこ(ん)の由来については、さらに吟味する必要がある。

滝廉太郎と東くめによるこの作品の歌詞は、全句にわたり子どもに分かりやすい口語体で、かつ短く簡潔な歌詞であるのに対し、唱歌「雪」の方は少し難解な古語表現の混じった語句もみられる。しかし難解な歌詞による歌の方が、現在に伝えられ愛唱されている現実、歌の作品も歴史の審判を受けるということであり、その視点から、我々は現代に生きる子どもたちに良い童謡や歌を提供する、という姿勢が必要なことを語ってくれる。ただ、現在に引き継がれていると言う一点だけをもって、どちらがより優れている、と優劣を論ずるのは軽挙であり、作品の価値判断はもっと複雑な芸術的感性と広範な知識によって行う必要があるのは言をまたない。

第2章 北原白秋の童謡観と童謡の展開

白秋はその生涯に、短歌、詩、童謡、評論、その他の多彩なジャンルで膨大な作品を残した²⁾が、白秋の童謡観を構成する核心とは何であろうか。表題に童謡と言う語句が用いられている著作に限っても、そこには「童謡私観」「童謡について」「童謡の鑑賞に就いて」「童謡の諸相について」等々、膨大な批評的著作が残されている。それらを通覧し考えると、“白秋にとっての童謡”と言う概念と、現代の我々の持っている概念とは、その根本において大きく異なっていることが解る。現代の我々は“童謡＝子どものための歌”、すなわち童謡とは、歌としての音楽が付けられている作品、と考えるのが前提である。しかし白秋にとっては、曲の有無はまったく問題ではなかった点に留意しておかねばならない。そのことは白秋が童謡(集)として発表した著作物に楽譜が付随しておらず、外面的には詩集と見做されることから明らかである。また白秋の童謡作品集に掲載されたものでも、その詞句が後に童謡の範疇を越え、日本歌曲の体裁、およそ児童の声域・音楽力・理解力などでは歌えない歌曲として取り上げられた作品が多数存在すること、しかもそれらの作品の中には、日本歌曲の作品群の中でもひととき高い評価を受けている著名な歌曲となり、現在も燦然と輝きを放っている作品が多数存在する事実が示すように、“白秋にとっての童謡”の概念は極めて広大である。

一方童謡と言うその名の通り、後に音楽が付曲され、童謡(うた)として名作となっている作品が存在するのも当然のことである。白秋は『日本童謡集 第一巻序文』において、自身の童謡観とその時代までに歌われた明治期の唱歌に対する見解を述べる³⁾。

童謡は童心童謡の歌謡である。而もまた純粹なる芸術価値をその価値とするところに、初めて真の童謡の香気と生彩とが保たれるであらう。…(略)…明治の小学教育は墮落した童謡の一面のみを見て、伝統ある正しいよい童謡をも排斥し去った。さうして之に換ふるに風土習慣の全然異なった泰西の歌詞と児童の生活感情に対してあまりにも無識な小学唱歌或は軍歌の歌詞を以つてした。

ここには、明治の官製唱歌集の多くに、富国・強兵・望ましい国民像、などが織り込まれていることへの批判、そして良い童謡(これの指す意味は、風土と民族の伝統を持っている作品の意)まで捨て去ったことへの批判が、そして童謡に純粹な芸術的価値を求める姿勢、が読み取れる。また白秋は「童謡とは何か」についてその著『童謡私感』で次のように宣言する。

新しい日本の童謡は根本を在来の日本の童謡に置く。日本の風土、伝統、童心を忘れた小学唱歌との相違はこゝにあるのである。従つてまた、単に芸術的唱歌といふ見地のみより新童謡の語義を定めようとする人々に私は伍みせぬ。西洋の詩、若くは童謡をそ

のまま日本に将来しようとするのも謬っている。見識ある摂取と融合はいみ。然し、身に染みついた産土のほひ、風俗といふものは決して等閑にすべきではない⁴⁾。

この一文のように、白秋は子どもたちのための童謡は「根本を在来の日本の童謡に置く」、すなわち“わらべ唄”の心と繋がるもの、でありたいと考え、また「日本の風土」に沿ったもの、すなわち日本の風土や天体・気象と齟齬がないこと、も重要な観点であり根本である、と述べる。また他の著作『叡智と感覚』では、

童謡は、子供には無論子供として相当にやさしく理解し得るものでなければならない。

さうして、大人が之に対へば愈々深い何物かをこの中に観、感じ、摸たれるだけの奥行を常に深く包蔵したものでなければ、真のいい童謡とは云はれない⁵⁾。

として、子どもがやさしく理解できる内容であるにとどまらず、良い童謡とは、その中から大人も心打たれる“深い何物か”、そして“奥行き”、何かを感じる“常に深く内蔵したもの”、を備えたものであること、を求めている。大人が心打(摸)たれる内容には、種々の美学的な評価観点があるのは言うまでもないが、作品成立の時代と言うことに留意するなら、当時の人々の営み、社会、そして日本人の文化や伝承などの背景にも気づくことによる感動への要因、を備えたものでありたいと白秋は述べる。そこで唱歌「雪」を、白秋の言う童謡観と照合させたとき、この唱歌は白秋の提唱する“良い童謡としての条件”と合致しているか、いないか、を論考するために、白秋のもう一つの重要な仕事についても、考察を進めておきたいと思う。

白秋自身の著述は全 40 巻に及ぶ膨大な『白秋全集』⁶⁾の存在により、我々はその巨人的仕事の存在を視覚的にも理解できる。しかしこれら白秋自身による著述以外に、白秋は日本の全国各地に伝わる伝承童謡を採録し『日本伝承童謡集成』として全六巻の大著にまとめる企画を興し、その先導を果たした仕事についてである。『日本伝承童謡集成』は『白秋全集』とは異なった意味で、大きな価値を持っている。ここに「収められた歴大な民衆の肉声は、無名者によってつづられたもう一つの万葉集の体をなし、日本文化の基層を彩る重要な遺産」であり「これほど民衆史の底辺に熱い錨鉛をおろしたものはない」⁷⁾からである。白秋亡き後もその採録作業は遺志を継いで続けられ、34 年の歳月を掛け、およそ二万篇の伝承わらべ唄を採録する⁸⁾と言う大事業に結び付けられたのである。この大著『日本伝承童謡集成』は童謡研究に多いに反映されるべきものであろう。集積されたものの中で「雪」を歌いこんだわらべ唄は、子守唄篇(巻一)に 5 篇／天体気象篇(巻二)に 112 篇／遊戯唄篇・中(巻四)に 5 篇／歳時唄・雑謡篇(巻五)に 2 篇／遊戯唄篇・下(巻六)に 2 篇で、全 126 篇を数える。それらの中から、雪だけではなく「雪・こんこ(ん)」「霰・こんこ(ん)」と言う語句を備えたわらべ唄(伝承童謡)をいくつか選んで抽出し(表 1)、唱歌「雪」の特徴となっている冒頭の歌詞“雪やこんこ 霰やこんこ”が、わらべ唄の中で既にどのように伝承されていたか、を通覧する。

表 1 が示すように、“雪やこんこ(ん) 霰やこんこ(ん)”の冒頭歌詞を共有するわらべ唄からは、下記のような各点が、浮かびあがる。

① “雪やこんこ(ん) 霰やこんこ(ん)”を持つわらべ唄は、日本の各地で広く伝承されている。

またこんこん、こんこの違いは日本の各地域で見られる。

② 雪／霰／こんこ(ん)と言う語句の隣接とその並び方は、伝承わらべ唄に多々見出せる。

③ 歌い出しに続いて、地域文化や暮らしに密着した語句が歌われ、歌の中にそれらが息づいている。(例:「丹後但馬の猪ころころや(京都・兵庫)」、「扇腰にさして きりりと舞いましょう(京都)」)

④ 子どもを取り巻く生活の中のものが、多くのわらべ唄に顔を覗かせ、囃し言葉の類や、言葉遊

びを思わせる語彙が繋がっているものがある。(例:お寺／和尚さん／梨の木／柿の木／山椒／子犬など)

⑤どのわらべ唄からも、雪を好ましいものとして喜び、心を躍らせる子どもの心情が見て取れる。

唱歌「雪」で歌われる歌詞と、最も近似しているわらべ唄の歌詞、を捜す視点からは、岐阜県と石川県で伝承されているわらべ唄と、最も近似性があると言えよう。ここまでは歌詞の面を見てきたが、続いて音楽の面での近似性を探してみたい。

昭和 61(1986)年に完結を見た白秋による『日本伝承童謡集成』には楽譜は付けられていない。しかし同書完成の 23 年後、尾原昭夫により数多くの採譜協力者を得て何篇かには楽譜を付けた『日本のわらべうた』が著された。同書には楽譜が収載されているので、その楽譜資料と照合する作業によって概要が明らかにできる⁹⁾。その結果、音楽面では旋律の近似性は見られないものの、主題の言葉に付点 8 分音符と 16 分音符によるスキップのリズムを割り振ると言う用法の点で、近似性が認められるものは、岩手のわらべ唄(楽譜【一】)である(表 1 に★印を付した)。また白秋版には所載されなかったわらべ唄で、福岡に伝承される唄「雪やコンコ 霰やコンコ (雪より女がやってくる 北の山からやってくる 早よ寝ろ早よ寝ろ おろろんばい)」(楽譜【二】)、また京都に伝承されるわらべ歌(楽譜【三】)の音楽リズムとも近似性が認められる。これらの点から唱歌「雪」は、白秋の指摘した「根本を在来の日本の童謡(わらべ唄)に置き」「日本の風土」に沿ったもの、と言う基準は立派に充足していると思ふことができよう。

白秋の童謡には、後に童謡ではなく、“日本歌曲”の歌詞素材となった作品が多数存在する点は先にふれた。以下には日本歌曲となった白秋童謡の作品の一例として、「曼殊沙華」と「からたちの花」を取りあげ考察する。

曼殊沙華
GONSHAN.GONSHAN. 何處へ行く。
赤いお墓の曼殊沙華、
曼殊沙華、
けふも手折りに来たわいな
GONSHAN.GONSHAN. 何本か。
地には七本血のやうに、
血のやうに、
ちやうど、あの兒の年の数。

『曼殊沙華』¹⁰⁾は初出後、白秋の童謡集『トンボの眼玉 (大正 8 年)』に再度所載された童謡である(図 1)。白秋は同書の序文にて、「幾分子供たちに読ませるには大人びすぎるが…」と書いているが、“お墓”、“血”、“血”、などの語句も子どもの童謡と言う概念とは距離がある。しかし、異国言葉のような冒頭の GONSHANG の響き、ちには しちほん ちのやうに ちのやうに ちやうど、に見るやうにちの子音が畳みこまれる語句の響きは、聞いても読んでも不思議な魅力を醸し出す。

この童謡(詩)作品は、やがて山田耕筰の手により華麗な日本歌曲『AIYAN の歌』内の組曲の一曲として、その姿を変えて行ったのである(楽譜【四】)。

からたちの花
からたちの花が咲いたよ
白い花が咲いたよ
からたちのとげはいたいよ
青い青い針のとげだよ
からたちは畑の垣根よ
いつもいつもとほる道だよ
からたちも秋はみのるよ
まろいまろい金のたまだよ
からたちのそばで泣いたよ
みんなみんなやさしかつたよ
からたちの花が咲いたよ
白い花が咲いたよ

『からたちの花』 本作は、大正 13(1924)年『赤い鳥』で発表され、耕筰により付曲された歌は大正 14(1925)年に『女性』で発表された。後の大正 15(1926)年、白秋による童謡集『からたちの花』で再掲されたものである。その童謡集の序文に、白秋は童謡と詩について、次のように記している¹¹⁾。

童謡をまた詩以下とし、低劣とし、作るに容易なりと見る向も多い。…略…詩人ならぬ教育家の俗悪な余技にも禍されてゐる。童謡なるが故に徒に幼しとする詩壇人の侮りはその本来を謬つてゐる。…略…この自選童謡集『からたちの花』は、ただ私自身の中

でもやや高級に属するものを多く選んだ。その故は、これらと私の他の詩歌との間に如何なる価値の懸隔ありやを見てほしかったからである。

白秋の述べる“高級に属するもの”の意は、白秋による童謡とそれ以外の他の詩歌などの著作とを比較した場合、双方の間にどれほど「価値の懸隔」があるかを問う目的と、白秋の童謡の多くが「常に動的なものに向けられる」と世間から見られている現状に対して、「静的な風体のものを収めた」のだと述べている。

歌詞は全四連からなり、どの連も“からたち”と言う同じ語句から始まり、各行末は“よ”と言う語（終助詞）で収められ、それが強い頭韻と脚韻を響かせている。各連を通じ常に白いからたちの花に寄せて内面が語られる。

この詩に付された山田耕筰による音楽(楽譜【五】)は、頻繁に変化する拍子、微妙な音楽的变化の連続、声部における高音の二点 g 音まで届く旋律、などにより子どもに歌えるものではなく、のみならず、声楽家にとっても技量の必要な日本歌曲として、その名を知らしめている¹²⁾。

これらごく一例を示すだけでも、白秋が童謡として描く世界、その心情は、子どもが日常的に暮らす“子どもの世界”から自由に飛翔し、視覚や聴覚は幻視性を帯び、また用いられる語彙を辿っても、子どもの理解力の点からは距離のある語句も用いられている。この視覚、聴覚、語彙の点から考えても、白秋の童謡は我々の一般的な意識にある童謡の範疇からは、あまりにも広大な広がりがあると言うしかない。白秋の述べる、大人がその語句から日本の伝承や文化との繋がりが、または感興の面で、感銘を受け得る何物かが存在しているか、の点を考えるには、『白秋研究』や『白秋論考資料考』を著した西本秋夫の指摘を考慮する必要がある。西本は、明治 36 年に白秋が『文庫』に投書した作品「月夜よし河のと清し歎之すずし葦ずり小舟葦いでぬらし」¹³⁾と、『萬葉集(巻 4・571)』の犬伴旅人による「月夜よし河の音清しいざここに行くも去かぬも遊びて帰かむ」を例示すると共に、白秋のその他の歌の比較により、詩人としての白秋の“文学的出発にあたって”の萬葉集の摂取は見逃してはならない、と指摘している¹⁴⁾点だ。そこで次章では日本の詩歌の根源とも見なされる『萬葉集』、さらにいくつかの古典籍へも視野を拡げて、唱歌「雪」に現れる語句を考察する。

第 3 章 語句を考える 古典籍への視点から

本曲の初出は明治 44 年の文部省による『尋常小學唱歌(二)』であり、それらの作詞には、わが国の古典籍に通じた当時の選りすぐりの国文学者たちが合議で当たっていた。また明治期の日本人の持っていた語彙に対する知識や感覚と、現代のそれとは、決して同一ではない。その観点から主題の雪、そして歌詞の中の重要な語句について、日本の古典籍へも視線を投じて、語句の血脈などの考察を行う。

【雪】もともと雪は、その年の農作物の豊作を示す瑞兆と考えられ、とりわけ新年の正月に雪が降ればその年は大豊作になる、と日本文化では考えられ伝承されてきた。萬葉人は詠う。

^{あらた}新しき 年の初めに 豊の稔 するすとならし 雪の降れるは¹⁵⁾ (連 葛井諸会 天平 18)

^{あらた}新しき 年の初めは いや年に 雪踏み平し 常かくにもが¹⁶⁾ (犬伴家持 天平勝宝 3)

^{あらた}新しき 年の初めの 初春の 今日降る雪の いやしけ吉事¹⁷⁾ (犬伴家持 宝字 3)

諸会(巻 17)は“豊の稔するすとならし”の言葉のように、新年の雪は豊かな稔り・五穀豊作の前ぶれとし、家持(巻 19)は雪の吉祥を踏まえつつ、“雪踏み平し 常かくにもが”と、毎年雪を踏みならして、来年も、これからもそのようでありたいものだ、と言挙げる。萬葉集を閉じる最後の歌となる家持の歌(巻 20)は、“いやしけ(弥重け)吉事”の語が表すように、これからも良い事

が重なり盛んになるように、との寿ぎを詠じている。

雪は、地表に積り、時間を掛けて融解し、地中に水分を蓄えさせ、それが水不足で苦しむ夏の季節に働いて、五穀に豊穰をもたらす恵の源となっていたことによる。これらの思想の源はどこにあるのかを古典籍に辿ると、530 年頃の中国南北朝時代に成立し、わが国には天平時代以前に伝えられ、平安時代には文人に読まれて多大な影響を与えた『文選』全 60 卷¹⁸⁾に遡ることが出来る。その大もとの記述は同書中の謝恵連による「雪賦」での以下の記述である¹⁹⁾。

「盈尺則呈瑞於豊年、表丈則表沴於陰徳。雪之時義遠矣哉。請言其始」
(尺に盈つれば則ち瑞を豊年に呈し、丈に表れば則ち沴を陰徳に表す。雪の時義遠
きかな。請ふ其の始めを云わん)

読み下しのように「雪賦」では、雪が一尺も積もれば豊年のきざし、一丈にもなると陰気となる。雪の持つ時々^{もろみち}の意義は大変遠大なものである、とする。中丸は²⁰⁾、この記述は永保三(1083)年頃からの藤原師通による『後二條師通記』に引用されたこと、また撰関家における中国古典「雪賦」と「師通記」を対称させる研究から、「雪賦からの知の廣がり、表現、思想の重層性を見ることができ、引用が単なる風流韻事ではない、つまり、雪の降り方が、豊作とかかわる、民の生活、まつりごと、とかかわる現実的な重要な問題であったということがわかる」と論じる。雪に対するこれらの感受は、以後、時代による揺れはあったとしても、日本人の雪に対する古き時代からの伝承、意識下の意識は、かくあったと言える。しかし竹嶋は²¹⁾、天武天皇が雪を詠みこんだ歌「吾が里に大雪落れり大原の古りにし郷に落らまくは後」の、大雪(オホユキ)・大原(オホハラ)・落れり(フレリ)・古りにし(フリニシ)・落らまく(フラマク)と言う語句がもたらす同音の繰り返しに着目し、「明るい、純粋な喜びに満ちた歌で、暗さは微塵もない」と雪景色の歌を評釈しつつも、評釈の厳密さを求めて言えば、雪を見る気持ちの表層だけではなく天武天皇の御代の「壬申の乱」の出来事、その後の治世、などの総体からも評釈すべきであること、そうするとこの歌を詠んだ「吉野」での雪と、苦勞をした「飛鳥」で見た雪の意味の違いが読み取れ、単に雪を瑞兆として見るのではなく、やっと手にした心の平穩により、雪は美しいものである、と詠じていると評釈するのが相応しいのではないかと論じ、楽しさ、明るさがあることだけで、雪は瑞兆である、と言う言葉は簡単には用いられるべきではないのでは、と厳密な評釈を求める立場での問題提起を行っている事にも触れておこう。

平安期の『枕草子』は長保3(1001)年頃に完成していたと考えられているが、その第233段に、「降るものは」として雪や霰の語句が登場する下記の記述が見いだせる。

降るものは 雪。霰。霰は、にくけれど、白き雪のまじりて降るをかし。雪は、皮茸き、いとめでたし。すこし消えがたになりたるほど。また、いとおほうも降らぬが、瓦の目ごとに入りて、黒うまろに見えたる、いとをかし。時雨、霰は板屋。霜も板屋。庭。²²⁾

降るものとしては雪と霰(あられ)がよい。白い雪がまじっておもしろい。みぞれは気に入らないけど、と雪と霰は一つの近親性でまとめられていることがわかる。ここでは雪を愛でた平安朝の人々の感性が伝わるが、言うまでもなく、雪の舞う姿はいつの時代も豪雪地帯を除けば人々の目を留め、子どもたちはその舞いを、目を輝かせて見ることに違いはない。

【こんこ】 唱歌「雪」の冒頭の「雪やこんこ、霰やこんこ」は前述した『日本伝承童謡集成』にも多くのわらべ唄として伝承されている唄の句である。この部分の^こん^こが、どのような用法なのか、についてはこれまで色々な考えが述べられてきた。なかにはこれを擬態語、オノマトペとする考えや、厳しい冷たさを“キンキン冷える”、“コチコチになる”と言った語句との繋がりを見る考えも有った。しかし“長い歴史の中で文字と発音は変化を続けるものである”との立場

から、古語・古典の研究者であり国語学者の大野晋は、わが国の古典である『源氏物語(21帖・乙女)』に「鳴り高し鳴りやまむ はなはだ非常なり 座を引きて立ちたうびなむ など、おどし言ふも いとをかし」の記述に着目し、これは「音が高い(=騒々しい)、鳴りやめよ(=静粛に)」と言う意味の用法であるとして、「千万人といへども我往かん」などのように「む mu→ む m→ ん n→ う u と言う変化を経たもの」「ムは相手に対しては勧誘とか命令とかの気持ちを表す語」であると述べる。²³⁾

【綿帽子】 と言う語句について歴史を辿る。“わたぼうし”として現代の我々が第一に思い描くのは、婚礼の際に和装の白無垢をまとった花嫁が、白く深い袋状の被り物で頭を装う姿であろうか。頭に帽子のように衣服を被る姿が残された最も古い図像としては、13世紀の終わり頃、鎌倉時代の作²⁴⁾と見做される『隆房卿艶詞絵巻』に貴重な図が残されている。この絵巻は、昭和38年に重要文化財に指定され、その折の正式な名称は「紙本白描隆房卿艶詞絵巻^{しほんはくびょうたかふさきようつやことばえまき}」として登録されたものである。その中に図像として被り物(帽子)をおびた女御の図を見出すことが出来る(図2)。この絵巻は全四段からなる²⁵⁾が、この被り物をした図、場面の背景は次のようなものである。第三段で帝と隆房卿が一人の女性、小督をめぐって激しく恋の火花を散らし、その場面を清涼殿の母屋で立て掛けられた和箏などととも図で描いたのち、小督への思いに身を焦がす隆総が苦しい心をしずめようと北野社に詣でようとする。「被衣^{かづき}に頭をすっぽりと包んだ女たちが、広い懸帯をして、物詣でに急ぐ」場面の描写で、ここは「物語りのクライマックスである」と小松は読み解く²⁶⁾。なお石川県に伝承されるわらべ唄には綿帽子が読み込まれたものがある。「じいじいのばあばあの^{わたぼうしゆき} 綿帽子雪が降るわいの おおとの^{しとみ} 都も立てさっせ 背戸の鳥が啼くわいの 摺鉢かぶって走らっせ」。ここでの綿帽子雪とは大片の雪の意である、と浅野は解説する²⁷⁾。また綿帽子と雪がと一つの語彙となった用例には、古く江戸・安永期の『諸国方言物類呼称』²⁸⁾に見出せ、同書では「東武にて綿帽子雪といふを、西国にて花びら雪と云、中国にて、へだれ雪と云、越後にて、ぼた雪といふ、上総にて、ぼたん雪と云、雲州にて、だんびら雪といふ」との記載が見られる。この文献は、雪に対する多彩な語句表現が各地で生きていたことを今に伝える。

【枯れ木のこらず花がさく】 この語句については、枯木に花と言う語句がいかに一般化していたかを江戸期の哲学書の記載が我々に語ってくれる。三浦梅園は安永六(1777)年の『多賀墨卿君にこたふる書』²⁹⁾において、

「雷は鳴る筈にて鳴り、地震は動く筈にて動き、枯木に^{はな}華さかんもさけばさく筈、石の物いはんもいへばいふ筈、とすまし^{たきもの}度物なり」

と著し、雷:鳴る、地震:動く、枯木に:華、石:もの言わず、の用法のように枯木に華をまるで対句のように用いていることから、この語句が一般化していたことが理解できる。

なお、この唱歌の全体的なルーツとしては、平安朝期の天仁2(1110)年頃の完成と考えられている『讃岐典侍日記』における鳥羽天皇に関する記述³⁰⁾において、

つとめて、起きて見れば、雪、いみじく降りたり。今もうち散る。御前を見れば、べちにたがひたることなき心地して、おはしますらん有様、ことごとく思ひなされてあたるほどに、「降れ、降れ、こ雪」と、いはけなき御けはひにておほせらるる、聞こゆる。

こはたそ、たが子にかと思ふほどに、まことにさぞかし。

を見ることが出来る。これは嘉永3年正月2日の記述であるが、ここにはまだ幼き鳥羽天皇が雪を見て「降れ、降れ、こ雪」と、あどけなく(いとけなく)歌っている様子を讃岐典侍が日記に残した場面である。この記述は文献上、子どもが歌う場面を描写した初の記録と考えられる上に、その歌が、まさに唱歌「雪」のルーツとしての位置を占めていることに深い感慨を覚える。

第4章 唱歌「雪」と読本「尋常小學讀本 卷四の十九」について

唱歌「雪」は文部省著作による『尋常小學讀本』の巻四として、明治43(1910)年に初出した「雪のあさ」の内容を典拠として唱歌になったと指摘されて来た。そこに所載された「雪のあさ」での記述は「…(略)… 松の木はわたをのせたやうに見えます。はのおちた木もみんなまっ白になってはながさいたやうです。犬はよろこんで、雪の中をとびあるいてゐます」³¹⁾と唱歌「雪」の情景を髣髴とさせる場面が、讀本の内容になっている。加えて筆者がさらに調査した結果、それよ

あるあさ、雨がふって、たいそー、さむう
ございました。

そのうちに、雪がふりだしました。その
ふるよーすは、ちよーど、白いはなびらの
ちるよーで、たいそー、きれいでした。

お昼ごろに、雪がやんで、日がてりだしました。
どこの家のやねにも、じめんにも、雪が、
五寸ほどつもりました。木のえだに
かかったのは、ちよーど、白い花がさいたよーで、
また、たいそー、きれいでした。

こどもは、よろこんで、そとに、でて、
あそびました。ゆきなげをして、あそぶものも
ありました。また、雪だるまをこしらへて、
あそぶものもありました。

しかし、日が、つづいて、てったので、
やねの雪も、じめんの雪も、だんだん、
きえていききました。また、雪だるまも、だんだん

り遡る明治 36(1903)年刊の『尋常小學讀本(四)』の第十四、に次のような内容が掲載されている(左欄)³²⁾。そこには本文に傍線を施したように、木の枝にかかる雪を白い花が咲いたようだ、子どもは喜んで外に出て遊ぶ、と言った雪景の美しさ、また花のようだ、という比喻、雪を喜ぶ心情が描かれており、この文章も伏線となっていた事がうかがえる。

第3章において、雪は瑞兆であり、雪が豊作をもたらす兆しと昔から伝承されてきたことは萬葉集などの歌を例示して述べた。明治40年の『尋常小學讀本』に対する教師用指導の手引きともいえるべき『讀本解説』の刻影が国立国会図書館に蔵されている(図3)³³⁾。その文献調査に進むと、指導に当たっての解説項目の記述の中に「雪は土地を被包して地温の發散を妨ぐるを以て、植物の幼芽を保護し、亦植物害蟲の繁殖を妨るので、古來豊年の兆であると云はれて居る」とある。このことから雪の吉祥とその所以について指導されたことが読み解ける。

一方、唱歌「雪」が初出した『尋常小學唱歌』に対する指導書とも言うべき明治44年に刊行された文部省編『尋常小學唱歌教材解説』(図4)では、「一夜にして銀世界を現出し、水晶波瑠の花、枯木の梢頭に宿る。これ天地の一大美観なり。…略…活動性に富める児童の降雪に對して、非常の愉快と興味とを有すことである。されば之を唱歌して、児童に愉快の感情を與ふるを、目的とす」³⁴⁾として、教材のねらいを自然の美観の鑑賞、そして愉快的気持ちを喚起させること、に力点が置かれている。尋常小學讀本に掲載された内容をくわしく検証し、その特徴を論じた岩田は、「『尋常小学讀本』では、自然現象や生物と児童とのかかわり自体の写生にも価値が置かれていると言える」と明治期の教育における児童観の一面を的確に論じた³⁵⁾が、これら調査と指摘の知見により、本作品のねらいに対しては、時代の認識が大切であることの証左となる。

第5章 唱歌「雪」音楽と詩の構成

本章では唱歌「雪」の音楽と詩の構造を概観する。楽曲構成はへ長調、第 7 音は欠如。2/4 拍子、4 小節×4 段の全 16 小節。歌の音域は、一点 f から二点 d の 6 度で、多くの人にとって声域上の困難はない範囲である。使用されるリズムは、4 分音符、付点 8 分音符、8 分音符、16 分音符、そして休符の 4 分休符、8 分休符、の計 6 種類である。ここで気づきたい点は、2/4 拍子の拍

節の基本単位である4分音符以上の長い付点4分音符や2分音符などは一切用いられておらず、音価は一拍の基本単位を超えることなく音楽が大変シンプルに運ばれる点である。各段のリズム

	1小節	2小節	3小節	4小節
1段目	☆ ☆	♪ ♪)	☆ ☆	♪ ♪)
2段目	♪ ♪ ♪)	♪ ♪ ♪)	☆ ♪ ♪)	☆ ♪)
3段目	☆ ☆	♪ ♪ ♪ ♪)	☆ ☆	♪ ♪ ♪)
4段目	♪ ♪ ♪)	♪ ♪ ♪ ♪)	♪ ♪ ☆	♪ ●

配置を細かく見て行くと、いくつかの特徴が浮かびあがる。それらを分かりやすく一覧表にしてみたのが左表である。

(表中、☆印はスキップ、) 印は8分休符、●印は4分休符)

曲の歌い出しは子どもたちの遊び歌によく見られるリズムであり、その一例を示すと「かくれんぼ」の歌の中間部分に出現する“じゃんけんぽんよ あいこでしょ”(楽譜【六】)に宛てられたリズムパターンとの類似性をあげられよう。唱歌「雪」におけるリズム配置の全体的な特徴の主たる点は、下記の4点に集約出来る。

- ・1段目と3段目は、スキップ(☆)のリズム配置が同じである。
- ・2段目の1・2小節と、4段目の1小節目は ♪ ♪ ♪ による同じリズムが置かれている(網かけ箇所)。
- ・スキップ(☆)が最も少ない段は4段目で、最終音に導く寸前の1箇所、のみである。
- ・唯一現れる4分休符は、楽曲の最後に置かれる。これは4段目に入ってスキップの減少した落ち着きのあるリズムによる音楽の結句として、最終音は長く伸ばさず、休符で歯切れよく楽曲を終結させる、それによって詠嘆の要素を除いている効果、が感じられる。

スキップの場所に置かれた歌詞を見てみると、「ゆーきや」「あられや」「ずん(ずん)」「つも(る)」「やーまも」「わたぼうし」「(はな)がさ(く)」であり、これを一つの文章にすると、「雪や あられや ずん(ずん) 積も(る) 山も 綿帽子 咲く」というように、この曲の主要な歌詞が、スキップで歌い繋げられることが解かる。このことから、雪を喜ぶ子どもたちの弾んだ気持ちを、スキップの跳ねるリズムに託して歌唱することの重要性が演奏解釈として姿を現すこととなる。

詩の構造を見ると、四行詩・二連の構成であるが、各行の末尾の語句は0-U-I-U / 0-U-I-Uと一連・二連ともに一定の同音による確実な脚韻が置かれている。一・二連とも「雪やこんこ霰やこんこ」と同じ語句で始まり、雪や霰の降り続く時間の持続が表出される。

白秋による『日本伝承童謡集成』の編集に携わった薮田義雄は、全集の完成する15年前、昭和36(1961)年に自身の著作『わらべ唄考』を著したが、「雪やこんこん、霰やこんこん」私はこの言葉が好きだ。「こんこん」という語感のうちに雪を喜び迎える感情が内包されているのでいかにも明るい。雪がしんと降るといふ形容も好きだが、この方には孤独感が伴い陰鬱が跡を曳く。詩的表現ではあってもわらべ唄にはふさわしくない」と優れた語彙への感受力を述べている³⁶⁾。“山も野原も綿帽子”、“枯木残らず花が咲く”の示すような「見立ての表現」を第一連と第二連にそれぞれ配することで、伝承されてきた雪を主題する数多くのわらべ唄からの脱却が果たしている点と、一連は雪の降る外界を、二連は室内との繋がりを描きわけ、そこに“犬は喜び庭駆け回り”“猫は火(炬)燵で丸くなる”の対句表現も加わり、これら要素を「新たに導入した新鮮な歌」として、わらべ唄から「見事に再生を遂げている」³⁷⁾のである。

本曲の主題である雪や他の語句、それらに対して日本人が抱いてきた共通の文化的・伝統的な思いへの知識の裏付けは、歌詞への深い共感性を生み、品格の伴った深みある歌唱の一助となる。

一つの歌の歌詞にひそむ長い文化の堆積を基盤として、そこに時代の変化に添った新たな魅力を付加しつつ、これからも歌い伝えられて行くことを願う。

注

1. 巖谷小波／他『お伽唱歌巻上:尋常科』博文館、明治 42.pp.30-31. 国立国会図書館(請求記号:特 45-936)、全 24 曲中の第 14 曲として掲載されている。
2. 藤田圭雄『日本児童文学大系 7 北原白秋』ほるぷ出版、1977. p.475. 藤田によれば、白秋の作品は童謡だけで 1,137 篇が、1991 年の編集段階で確認できるとする。
3. 北原白秋『日本童謡集第一巻序文』『白秋全集第 20 巻:詩文評論・童謡雑論』岩波書店、1986. pp.72.
4. 北原白秋『童謡私観』『白秋全集第 20 巻:詩文評論』岩波書店、1986. p.38. 本論の初出は 1923 年の『詩と音楽』
5. 北原白秋『叡智と感覚』『大観』大正 11 年、「白秋全集第 20 巻:詩文評論」岩波書店、1986. p.62. 本論の初出は 1922 年の『大観』『新年特別増大号』
6. 北原白秋『白秋全集』全 40 巻、岩波書店、1986.
7. 松永悟一「肉声の宝庫」『日本伝承童謡集成第一巻』岩波書店、1974. オビ
8. 薮田義雄「全巻の完結にさいして」『日本伝承童謡集成第六巻』岩波書店、1986. p.311-312. 薮田は「昭和十七年十月、(中略)編集責任者になることを命じられたが、それからはいくも三十四年の歳月が経過している。…略…昭和五十年代の今日、およそ二万篇という膨大な数量の伝承わらべ唄が、系列的に集大成されて陽の目を仰いだということ、これはまさしく空前であり、おそらくはまた絶後であろうと信じる」と記している。
9. 尾原昭夫『日本のわらべうた(歳時・季節編)』文元社、2009. pp.230-236.
10. 北原白秋『日本児童文学大系 7 北原白秋』ほるぷ出版、1977. p.3. 童謡「曼殊沙華」は明治 44 年刊の『思ひ出』に初出、そののち大正 8 年『とんぼの眼玉』に再度収録された。同書は凝った装丁とともに清水良雄による画が描かれている。本曲に関する画像、その他、は国立国会図書館の公開画像による。
11. 北原白秋『からたちの花』序文、「白秋全集第 20 巻:詩文評論」岩波書店、1986.pp.77-78. 本論の初出は 1926 年の『日光』第 3 巻 3 号。
12. 白秋の作品「からたちの花」を歌詞として、山田耕筰の付曲により二種の歌曲が残されている。「その二」の存在はあまり知られていない。後藤暢子・校訂『山田耕筰作品全集 第 7 巻』及び『第 8 巻』日本楽劇協会刊行、1992. にそれぞれが所載されており、「その二」の方は、歌唱の技術的難易度は高くはない。
13. 白秋のこの一首での“歎之”は「ふなうた」と読む。
14. 西本秋夫『白秋論考資料考』大原新生社、昭和 49. p.227-229.
15. 小島憲之／木下正俊／東野治之:校注『新編日本古典文学全集:萬葉集 9』小学館、1996. 巻 17-3925、p.161
16. 小島憲之／木下正俊／東野治之:校注『新編日本古典文学全集:萬葉集 9』小学館、1996. 巻 19-4229、p.335.
17. 小島憲之／木下正俊／東野治之:校注『新編日本古典文学全集:萬葉集 9』小学館、1996. 巻 20-4516、p.460.
18. 『文選』は現存する中国最古の詩文集で、後の『注記』を含めて全 60 巻よりなる。6 世紀前半に成立した中国古代文学の主要資料。
19. 高橋忠彦『新釈漢文大系 81 文選(賦篇・下)』明治書院、平成 13. pp.87-88.
20. 中丸貴史『漢文日記叙述と漢籍—撰関家の日記としての『後二条師通記』—』「日本中国学会報(63)」、2011. pp.271-274.なお、藤原師通の『師通日記』は永保 3(1083)年から康和元(1099)年にかけて書かれたものである。
21. 竹嶋麻衣『雪をめぐる相聞—天武天皇と藤原夫人の贈答歌の位置付け—』「熊本県立大学大学院文学研究科論集 1 号」2008. pp.77-79.及び pp.86-89.
22. 松尾聡、永井和子『枕草子』『日本古典文学全集 18』、小学館、1997. p.370.
23. 大野晋『日本語をさかのぼる』岩波新書、1974. pp.89-91.

- 24.小松茂美『『葉月物語絵巻 枕草子絵詞 隆房卿艶詞絵巻』「日本の絵巻 10」、中央公論社、昭和 63. pp.118.
小松は「隆房卿艶詞絵巻」はこれまた、詞書の料紙の叢書技巧などから推して、鎌倉時代・十三世紀の終わりのころの製作に推すことは、的をはずすものではあるまい」と判定している。なお、本絵巻の読み方は現在も一定しておらず、艶詞を「えんし」、「こいことば」、「やさことば」などの読みが見られる。
- 25.小松茂美『同書』、pp.76－91. 本絵巻は、第一段：桜を賞でる帝と小督、第二段：隆房と小督の逢瀬、第三段：帝と隆房の恋の鞘当て、第四段：北野社に詣でる隆房、の四段構成からなる。
- 26.小松茂美『同書』、pp.91－92.
- 27.浅野健二／町田嘉章：編『わらべうた』岩波書店、2003. P.146. なお、お・おとは方言で家や宅地の入り口、玄関、などを意味し、蔀(しとみ)は日本建築で上風雨をさえぎる目的から、板の両面あるいは一面に格子を組んで吊(つ)り下げた格子戸。
- 28.越谷吾山『諸国方言物類呼称』安永四(1775)年刊(国立国語研究所蔵書目録データベース、巻一：W52-5/Ko85/1)
- 29.尾形純男／島田虔次：編注訳『三浦梅園自然哲学論集』岩波文庫、1998.p. 12-13. 梅園は享保八(1723)年生一寛政元(1789)年没。同書 p.27.加藤周一の言(『日本文学序説(加藤周一)』)によれば、三浦は日本学問史上、空海、道元らにつながる人として位置付けられ、現在は世界に注目される哲学者である。
- 30.石井文夫：校注『讃岐典侍日記』「新編日本古典文学全集 26」小学館、1994. pp.439-440.
- 31.海後宗臣：編著『日本教科書大系 近代編 第 7 巻 国語(四)』、講談社、昭和 38. pp.68-69.
- 32.文部省『尋常小學校讀本(四)』博文館、明治 36.定価金七銭、pp.47-50.(筆者蔵)
- 33.帝国教育会：編『尋常小學校讀本解説：修正. 巻 4』南北社出版部、大正 7. pp.178. 国立国会図書館、263-259
- 34.松岡保『文部省編尋常小學校唱歌教材解説 第二編』廣文堂書店、明治 44. 国立国会図書館、特 23-760、pp.63-66. 著者の松岡保は東京府青山師範学校教諭で、全 20 曲に対して、要旨／歌詞／曲節／豫備練習と分け、当時の一般的分析力を思うに、はるかに優れた記述を行っている。
- 35.岩田一正『教科書に見られる児童像の転換－明治期の国語読本を中心に－』「成城大学大学院文学研究科日本常民文化紀要 29.」2012. pp.185.-186.
- 36.薮田義雄『わらべ唄考』カワイ楽譜、昭和 36. p.246.
- 37.小野恭靖『子ども歌を学ぶ人のために』世界思想社、2007. pp. 170.

資 料

(表 1) 白秋の集成した伝承わらべうた の中から

地方 県	伝承わらべうた 歌詞の冒頭	収載巻頁
岩 手	雪やこんこ 霰やこんこ こんこの山から小豆餅とんで来う	巻二／30
岩 手	雪やこんこん 霰やこんこ こんこんのお寺さあずきばた溜まって あずきあ凍み凍	巻二／31★
岐 阜	雪やこんこ 霰やこっこ 降っては降ってはずんずんつもれ	巻二／55★
静 岡	雪やこんこ 霰やこんこ つもれつもれ 沢山つもれ 積もったうえにまたつもれ	巻二／55
石 川	雪やこんこ 霰やこんこ 背戸の梅の木にとまれやこんこ 寺の柿の木にとまれやこんこ	巻二／68
石 川	雪やこんこん 霰やこんこん 降っても降ってもまだ振りやまぬ 仔犬よろこぶ おいら	巻二／69★
新 潟	雪やこんこん 霰やこんこん お寺の梨の木に すっころころんととまれ とまれ	巻二／69
新 潟	雪やこんこん 霰やこんこん お寺のてんぼ梨はなおこんこん	巻二／69
京都一兵庫	雪やこんこ 霰やこんこ 丹後但馬の猪ころころや	巻二／91★

大 阪	雪やこんこん 霰やこんこん降っといで 丹波のおばはん降っといで 雪やこんこん 霰や	巻二／91
京 都	雪 雪こんこ 霰やこんこ 扇腰にさして、きりと舞いましょう	巻二／92
鳥取－島根	雪やこんこや 霰やこんこ お前のお背戸で団子も煮える 小豆も煮える 山人は戻る 赤子は	巻二／110
岡 山	雪やこんこん 霰やこんこん 奥のぼあさん お寺の柿の木 一升五合たまれ	巻二／110
愛 媛	雪やこんこ 霰やこんこ お寺の垣の木へ 雪やとまりこんこ	巻二／118
高 知	雪やこんこ 霰やこんこ お寺の柿の木に 降れ降れ かかれや米の粉	巻二／118
徳 島	雪やこんこん 霰やさっさ 室内灰だらけ	巻二／118
福 岡	霰こんこん 雪こんこん 裏のどんじょ堀 降ってこんこん	巻二／132
熊 本	霰こんこん 雪こんこん 寺の和尚さんな すこんこん	巻二／132
宮崎－鹿児島	雪やこんこん 霰やこんこん お寺の山椒の木 ひっかかってこんこん	巻二／132

楽譜【一】



楽譜【四】 曼殊沙華



楽譜【五】 からたちの花



楽譜【六】 かくれんぼ



図 1 トンボの眼玉



図 2 隆房卿艶詞絵巻



図 3 尋常小學讀本解説

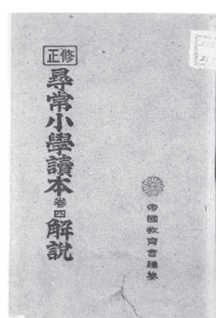


図 4 尋常小學唱歌教材解説

